はじめに　007

第1章 日本人はなぜ議論が下手か　011

闘論バトル?!／噛み合わない／「論理的」は「英語的」／ロジックは英語の「心の習慣」／論理以前／日本人のコミュニケーションはテレパシー／「はっきりしてくれ!」／ホンネとタテマエ／謙遜は通じない／「英語化」するコミュニケーション／「ごめんなさい」のその先／ほめて貶める／単一化する世界／壊れるハラ芸、身につかないロジック

第2章 ロジックの英語、ハラ芸の日本語　039

日本語に主語はあるのか／「私は神の子」／垂直の思想／IとYouはわかり合えない／誰でもよく誰でもない「私」／相手に応じて変わる／「なります」の思想／むすんでは生まれる八百万の神々／いのちの時間／なりますままのいのち／日本で変容する仏教思想／「もったいない」がわからない／ものに宿るいのち／能動的受け身表現／「ナンバ」は主客一体／失われる身体技法／国語教育に身体知を

第3章 現代国語はどうして生まれたのか　067

明治の日本語革命／「現代文」の恩恵／評論用語がわからない／考える方向性に沿う用語——帰納と演繹／行為の両面を表す用語——抽象と捨象／連関する評論用語／英語ではただの日常語／日本語と論理のややこしい関係／時系列が明瞭な英語、状況依存の日本語／消えた論理指標／冠詞や指示語の情報量／冠詞、指示語の威力／英語にならない／過去形だけど現在形／「イイタイコト」は現在形／和魂洋才が生み出したオニっ子／ふたたび問われるもの

第4章 ロジカルトレーニング［基礎理論篇］　095

ディベートはロジカルコミュニケーション／「あたりまえ」が落とし穴／意味より形／クレームをつくる3つの条件／論証責任を見つける／さらに2つの条件／クレームになるかならないか／「〜と思う」に着目／ロジックの基本——クレーム、データ、ワラント／ひたすら論証責任を果たす／ワラントの省略／ワラントは1日にしてならず／ロジカルな現代文／パラグラフ(段落)の意味／論証責任は自分に還る／言論の自由は論証責任を伴う／小論文で問われること／論証責任の重さ

第5章 ロジカルトレーニング［アウトプット篇］　135

Ⅰ 意見を述べる　136

意見の必要条件／シンプルな三角ロジック

Ⅱ 反対する　142

反対するための鉄則／反対の仕方、3つの方法／反対することから始まる新たな応酬／クレームへの攻撃はアンフェア／反対意見トレーニング

第6章 ロジカルトレーニング［インプット篇］　161

三角ロジックのパターン／レトリックとは何か／クレームとレトリックを摑む／レトリックの根本原理／同形反復・反転反復の実例／形は機能／仕上げの問題／現代文の難しさ／極意は「使い分け」／究極、ハラ芸／グローバル時代のホンネとタテマエ

あとがき　212

はじめに

近年、文部科学省は、特定科目に重点を置く教育カリキュラムを推進し、その研究開発を行なう高校の指定事業を進めている。具体的には、2002年度から、理科・数学に重点を置くスーパーサイエンスハイスクール（26校）、英語に重点を置くスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（18校）が指定され、現在もその数は増え続けている。

さらにその一環として、2003年度からは、小中学生の国語力向上に総合的に取り組む「国語力向上モデル事業」がスタートした。国際調査で著しい低下が指摘された児童生徒の「学力」に危機感を募らせた結果だろう。これら一連の取り組みから明らかなことは、文科省が「確かな学力」の基礎を「論理的な国語力」と捉えているということだ。

こうした動きを受け、私が身を置く大学受験業界でも、多くの予備校がしのぎを削って「国語力向上モデル」マーケットに参入しようとしている。業界挙げての「論理」ブーム、教材制作合戦である。

私は、基本的には文科省の取り組みの方向性は正しいと思う。今日のグローバル化の中で、正しく西洋的論理思考を身につけることは、まさに焦眉の急である。問題は、教育の現場で、しばしばあたりまえのように「現代文」が

れを英語のように統語上の機能から定義することは、日本語ではほとんど不可能である。たとえば、現代文で言う助動詞は、明治期に英文法を無理やり日本語にあてはめて設定したもので、これをそのまま論証責任の定義に用いることはできない。現代文で「だ」は断定の助動詞だが、「彼は教師だ」と言っても、必ずしも主観的な意見になるとは限らないだろう。

そこで、本書では、文尾に「～と思う」と付け足すことができる発言を「日本語でロジックを扱う際のクレーム」と定義することにしよう。「今日はカレーを食べたい」は、「今日はカレーを食べたい（と思う）」というクレームである。「彼は教師だ」も、「彼は教師だ（と私は思う）」と言えるのなら、論証すべきクレームになる。逆に、単に事実を述べているだけなら、クレームにはならない。

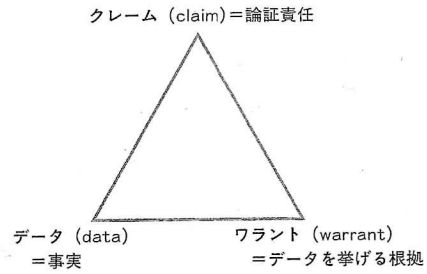
論証責任を口にしたにもかかわらず、その責任が果たされない言論は、アメリカ人はそれを無責任な「放言」と見なす。真の「言論の自由」とは、論証責任を果たす限りにおいて、保証されるものなのだ。

もちろん、場や相手との関係によっては、アメリカ人でも“I think so, too.”（私もそう思います）や“I agree.”（同感です）といった返答はあり得るが、われわれ日本人がロジックのトレーニングを行なうときには、それはないものと考えたほうがよい。それでなくても、日本人の心の習慣は、関係性への「甘え」＝「察し」に基づいたものである。相手が口にした論証責任に対しては、機械的に“How and why?”と説明を求め、自分も口にした論証責任は果たす。

そのように心がけてほしい。

†ロジックの基本――クレーム、データ、ワラント

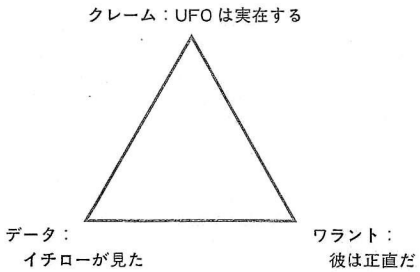
次の図を見てほしい。



ディベートで「三角ロジック」と呼ぶものだが、これがディベートの原理である。クレーム・データ・ワラントの3つは不可分で、これら3つが揃って初めてロジックは成立する。

いったんクレームを口にしてしまったら、必ずデータとワラントを挙げて論証しなければならない。つまり、データとワラントを挙げることが「論証責任を果たす」ということだ。言い換えれば、データ・ワラントのない発言は、クレームではなく放言である。

たとえば、“UFO is real.”（UFOは実在する）をクレームとした場合、次のような三角ロジックが成り立つ。



日本人がアメリカ人と会話していて、まずつまずくのが、データを挙げることである。日本人が「どのように、なぜUFOが実在するのか？」と問われると、たいてい「NASAがどうのこうの……」とか、「地球外生命体がどうのこうの……」と、到底手には負えない大きな議論に飛躍させてしまいがちだ。これでは、相手の思うつぼである。ディベートでは、足下をすくわれてしまうだけだ。

データでは、「事実」を述べる。とりあえず、どんなことでもかまわない。事実は、身の回りに無数に存在する。「私は男性だ」も事実なら、「ここは日本だ」も事実である。とにかく何でも1つ事実を述べるのがデータであり、これがロジックの第1歩である。

ここでは、「イチローが見た」をデータに挙げてみることにしよう。

しかし、「イチローが見た」から「なぜUFOが実在する」と言えるのか、その「因果関係」がはっきりしない。やはりディベートなら、“So what?”（だから何？）で一巻の終わりである。「だから何なのか」。「イチローが見たからといって、なぜUFOが実在すると言えるのか」――無数に存在する事実の中から、なぜわざわざ「イチローが見た」という事実を取り上げるのか――その「根拠」を述べるのがワラントである。

†ひたすら論証責任を果たす

では、「イチローが見た」という事実は、どんな根拠があれば、「UFOは実在する」というクレームを支えるデータになり得るのだろうか。

もしあなたが英会話の教室でこの発言をしたとすると、良心的なアメリカ人の先生なら、“Who is Ichiro? Is he your friend? Is he an honest person? Do you trust him?”（イチローとは誰ですか？　あなたの友達なのですか？　正直な人なのですか？　あなたは彼を信用していますか？）と、矢継ぎ早に誘導尋問をかけてくることだろう。そう、「正直な人だ」という根拠がほしいのである。無意識のうちに、三角ロジックのワラントを補おうとしているのだ。

「イチローは正直だ」という根拠があってはじめて、「イチローが見た」という事実は有効性をもち、「UFOは実在する」というクレームのデータとなり得る。三角ロジックが成り立つというわけである。つまり、「論証責任を果たす」とは、「根拠のあるデータを挙げる」ことにほかならない。

さて、実際のディベートで、この論証を行なったとすると、もちろん相手はワラントに対して、“How and why

「ロジックの科目」とされ、「論理は普遍的にすべての言語に存在する」といった言い方がされることだ。

もともと日本語に「論理」は存在しない。それは、西洋由来の学問を学ぶ道具として、明治時代に初めてもたらされたものである。ロジックを無理やり日本語にあてはめ、いわば「英語の翻訳」としてつくり出された新しい日本語のスタイルが、「現代文」である。ロジックは、特殊英語的な発想法なのであって、決して普遍的ではないのである。この意味で、「もともと日本語に「論理」はないが、現代文に「論理」はある」というパラドキシカルな言い方ができる。そして、このパラドックスこそ、日本語でロジックを扱うことの難しさと限界を物語っている。

本書の目的は、日本語による論理運用のトレーニングをすることである。ただ、その前に、日本語と英語、それぞれの言語の背景にあるものを学んでおきたい。一見遠回りのようだが、そのほうがより問題の本質に近づけるはずだからである。

言語の背景には、長い時間をかけて培われた文化的な風土（心の習慣）があり、言語と心の習慣は密接に影響し合っている。それら心の習慣の違いをしっかり踏まえた上でなければ、日本語による論理運用のトレーニングは、結局は中途半端なものになってしまうだろう。

われわれは、もう一度英語を通してロジックとは何かを学び直さなければならない。とくに「聞き話す」のレベルで、英語との対比において、必要最低限のロジカルなコミュニケーションの仕方をトレーニングし、その上で現代文のあり方を考え直すことが、火急の課題だと思う。

パラパラとページをめくってみて、「英文が多い」という印象をもたれるかもしれない。英語と日本語の論理機能面での違い（ひいては現代文の限界）を明確にするためには、英文の使用は、どうしても避けられなかった。とくに論理思考の要とも言うべき「論証責任」は、英語との比較においてしか、説明は不可能である。

とはいえ、形（＝論理機能）の違いさえわかっていただければ、それでよい。英文が出てきても、その「意味」ではなく「形」にのみ注意してほしい。第6章の「インプット篇」でも、純粋な現代文のテキストとしてなら、青をかぶせた英文は無視して、和訳でトレーニングを進めていただいて一向にかまわない（英語の勉強を兼ねた読者は、もちろん英文でチャレンジしてほしい）。解説を読み、「そんなものかなあ」と思っていただくだけで十分である。そのための仕掛けは豊富である。

本書は、「英語が苦手」と思っておられる方にこそ、ぜひ読んでいただきたいと思う。われわれが意識せず使っている現代国語のあり方は、英語を抜きにしては語れない。

本書は、英語教育の現場に立つ者からの「国語力向上モデル事業」に対する1つの提言であり、応答である。

※囲みの問題文で英文を無視してよいものにはジャンプしたイルカのアイコンを付した。

あとがき

私が身を置く受験産業では空前の「論理」ブームなのだが、知識人の世界では「論理は国を滅ぼす」という論調が主流になりはじめているようだ。まったく正反対に思えるこれらの動向は、どちらも正しい。そのことは、ここまで本書をお読みくださったみなさんなら、即座にうなずいてくださると思う。

察しやハラ芸という日本人の心の習慣の形成には、自然や歴史といった環境条件が深く関わっていたと思われる。

ロジックを育んだ自然環境は、およそ厳しい大陸性のそれだった。これに対して、日本の美しい自然は人間に優しく暖かい。四方を海に囲まれた四季折々の豊かな山河の恵みは、日本人にとって世界中のどの民族以上に肯定しやすく、したがって日本人は「お日様」や「お月様」、「お水」、「お土地」など、自然を「聖なるもの」として受け止め、同化することができた。自然を敵視したり、対象化したりする必要はなかったのである。

あるいは、西洋人が放浪や侵略虐殺を繰り返したのに対して、日本人は、鎌倉時代二度に渡って蒙古軍が襲来した「元寇」や、太平洋戦争における沖縄戦を除いて、他民族から侵略を受けた経験をもたない。さらに江戸時代までは移動の自由がなく、集団から排除されることは、ほとんど死を意味した。察しやハラ芸は、こうした静態的な関係の中で生きていくためのコミュニケーション手段として発達したものだ。もっぱら自己を押し殺し、周囲と同化しようとする心の習慣が形成されたのである。

論理は、もともと日本語にはなかった心の習慣である。論理がいかに日本語の美しい情緒的な察しやハラ芸のコミュニケーションを蹂躙するかは、すでに本書の読者には馴染み深い物語だろう。しかし、それと同時に、ますます国際化する世界の中で、否応なく他者と交わることを余儀なくされ、もはや察しやハラ芸だけでは通用しない時代に生きていることも、また紛れもない事実である。

いま多くの知識人が、グローバル社会における「論理」の専制と暴虐を批判し、憂慮している。まさに、わが意を得たりの思いである。しかし、大衆レベルでの現実に目をやると、論理思考を正しく身につけた日本人は、実はほとんどいないと言ってよい。受験生の大半は、論理のイロハすらわかっていない。論理を超えるためには、まず論理を踏まえていなければならないが、その肝心の論理の前提がないのである。

書店に行けば、「ロジカルシンキング」や「論理的思考法」と銘打った本が、所狭しと平積みされている。ところが、そのいずれを見ても、肝心の「論理」とは何か、「ロジック」とは何かということになると、明確な定義はなく、単に「話の筋道」のことであったり、「効率」や「シンプルさ」のことであったりするようだ。

しかし、論理とは決してそんな曖昧なものではない。かと言って、MBA的、あるいは論理学ベースの専門書を読

まなければならないというものでもない。第一、「朝まで生テレビ」で口角泡を飛ばしてなじり合っている知識人の多くが、大学の哲学の講義で論理学を学んだ人たちではないか。論理とは、要するに英語の心の習慣であって、それ以上のものでも、それ以下のものでもないのだ。

日本の「国の個性」を守りながら、いかにグローバル化(英語化)の要請に応えていくのか。われわれは、この大きい難問に直面している。最近かまびすしく必要が叫ばれるようになった早期英語教育が、その解決になるとは決して思わない。

文科省が取り組んでいる「国語力向上モデル事業」は、国語という科目だけの問題ではなく、英語も巻き込んだ壮大なプロジェクトであるべきだろう。「日本語はロジカルには運用できない」という認識を出発点とした現代文教育の見直しが必要である。

より具体的に言うなら、(限界を踏まえた上での)日本語による正しい論理教育と、他方における伝統的な身体知教育を2つの柱とする国語教育を構築することである。本書は、もっぱら前者の具体的方法を扱うものであるが、もしそこに1つの方向性を示すことができたとすれば幸いである。

ただ、入門書の性格もあり、残念ながら本書では、複数の意味段落から構成される長い論文(英文)を扱うことはできなかった。読者のみなさんの声を待ち、次回を期したいと思う。

最後になったが、本書は、ちくま新書編集長の磯知七美さんとの出会いがなければ、決して世に出ることはなかった。磯さんの卓抜した洞察力と言語感覚が、どれほど私を刺激し、いまの環境にはない鮮烈なインスピレーションをもたらしてくれたかわからない。心からお礼を申し述べたい。

2006年3月

横山雅彦

ちくま新書
604

高校生のための論理思考トレーニング

2006年6月10日 第1刷発行
2022年3月5日 第12刷発行

著者
横山雅彦
(よこやま・まさひこ)
発行者
喜入冬子
発行所
株式会社筑摩書房
東京都台東区蔵前2-5-3 郵便番号111-8755
電話番号03-5687-2601(代表)
装幀者
間村俊一
印刷・製本
三松堂印刷株式会社

本書をコピー、スキャニング等の方法により無許諾で複製することは、法令に規定された場合を除いて禁止されています。請負業者等の第三者によるデジタル化は一切認められていませんので、ご注意ください。
乱丁・落丁本の場合は、送料小社負担でお取り替えいたします。
© YOKOYAMA Masahiko 2006 Printed in Japan
ISBN 978-4-480-06305-2 C0280